

# 法華經の懺悔思想

## 宮澤勸次

はじめに

清淨觀 (śuddhi) は、仏教において早期から、自性・自然として尊重されてきた。

八千頌般若經 (施護訳) は、「色清淨故即果清淨。果清淨故即色清淨。若色清淨若果清淨。無二無分別無斷無壞故。(中略) 虚空清淨故。般若波羅蜜多清淨。」とのべている。つまり、存在は清淨であるから、持戒・果報も清淨なのである。二者は不分、不二である。また、虚空が清淨であるから最高智も清淨なのである、という。

法華經においては、經力により六根の清淨を得れば、父母所生 (自然) のままで、六根の神通力を發揮できるといふ。

しかし、このような清淨性は、戒 (śīla) を保持する行為生活から生れる。法華經のなかにも戒 (śīla) は序品から各品にみられる。

持戒者が破戒した場合、清淨性は失われるが、破戒者は慚

愧 (hīni) の念を生じ、懺悔 (tesanā) をするのである。これによって清淨性は回復されるのである。戒と懺悔とは一枚の裏表であり、相即不二の關係にある。例えば、梵網經のように戒經に懺悔の項がある。

天台も摩訶止觀のなかで、「律文<sup>④</sup>皆有懺法<sup>⑤</sup>。懺法若<sup>⑥</sup>成ス<sup>⑦</sup>。悉<sup>⑧</sup>名<sup>⑨</sup>清淨<sup>⑩</sup>。」といっている。戒法の存在するところ、必ず懺悔思想が潜在する。

### 一 法華經の戒思想

中世関東天台の学匠尊舜は、摩訶止觀見聞のなかで、「(法華經) 一部始終二十八品尽皆戒法也。」とのべている。

天台法華宗学生式問答は、最澄の講説を筆受したものとされるが、このなかで最澄は、仏子の戒つまり菩薩戒は何經によるべきかとの問いに対して、「正<sup>①</sup>、依<sup>②</sup>法華經一乘戒、三如来室衣座戒、身口意誓、四安樂行戒、普賢四種ノ戒<sup>③</sup>、次<sup>④</sup>依<sup>⑤</sup>普賢經三師諸證同学<sup>⑥</sup>、傍<sup>⑦</sup>依<sup>⑧</sup>梵網經 (中略) 等<sup>⑨</sup>大乘經<sup>⑩</sup>」

二。」と答えている。すなわち菩薩戒の正依經には法華經と觀普賢經とをあげている。法華經ではまず、法師品に説く、「如来の室」の大慈悲心、「如来の衣」の忍辱心、そして「如来の座」の一切法空、つまり一切の存在を因縁所生（仮和合）とみる空觀を戒とし、次に安樂行品の、身口意三業について過誤を厭離するための行法と持経広宣の誓願の実践とを戒とし、さらに普賢觀発品に説く、一、諸仏に加護されること、二、多くの善根を殖えること、三、不退転の信仰に入ること、四、一切衆生を救う心を起すことの四法を戒としている。

觀普賢經は、法華經の結經とされるが、その三師諸證同学とは、山家学生式に依れば受戒の作法で、釈尊を菩薩戒和上とし、文殊菩薩を羯磨師とし、弥勒菩薩を戒教授とし、十方の諸仏を、證師とした同伴侶とする、いわゆる自然得戒をいうものである。

尊舜の鷲林拾葉鈔は、法華經の戒思想を数論している。

法師品の如来の衣座室について、「此衣座室三三諦三觀三身三徳也。戒心、三聚淨戒也。如来衣者法身中道撰律義戒也。座者報身空觀撰善法戒也。室者心身仮諦饒益有情戒（撰衆生戒）也。」という。

次に、安樂行品の身・口・意・誓願の四安樂行について、「四安樂行戒者三聚淨戒也。一身安樂行者律接（撰）儀戒也。口意、二接善法戒也。誓願安樂、饒益有情戒也。」といつてい

る。しかしこれらは、天台、法華文句の解釈を受けたものである。

## 二 法華經の懺悔思想

五百弟子受記品は、五百の阿羅漢（声聞）が、受記の後で懺悔したことを次のように記している。「爾時五百阿羅漢。

於三仏前。得受レレ記ヲ已リ。歡喜跳躍。即從レ座起チ。到ニ於仏前ニ。頭面ニ礼シテ。悔過シ自責。世尊ヨ。我等常ニ作レ是ノ念ヲ。自謂ヒテ曰レ得リト。究竟滅度ヲ。今乃チ知レリ之。如ニカリシテ無知ノ者。所以者ハ何シ。我等応ニカリシレ得ニ。如来ノ智慧。小智ヲモツテ為ス足レリト。」と。

五百の阿羅漢は、自利の小乗の智に安じて増上慢となり、利他の仏心を持ちあわさなかつたことを懺悔 (Jossyano) したのである。

この梵文を、羅什は悔過と翻じて懺悔の語を使用していない。

方便品のなかで注目すべきは、「有慚愧清淨」(ai, suci)の一句である。慚愧つまり懺悔すれば、六根は清淨に帰するのである。

慚愧と懺悔とは概念的に区別されるようであるが、世親の具舍論頌は、「自性ハ慚愧ト根トナリ。」といい、円暉の頌疏は、「自性慚愧根ト者。根ハ謂ク無貪等三善根及慚愧ノ二ナリ。此五法ハ

体性は善。猶如良菓。名曰自性善。」<sup>13</sup>と云っている。

ここで自性善とは自性清浄心に通ずるもので、その内包は、清浄心と慚愧とである。それ故、慚愧と懺悔とを区別する必要はないであろう。

天台は法華文句のなかで、方便品のこの一行は、衆生が仏に遇つて記を受ける次第を頌するものとのべている。<sup>14</sup>

天台は、戒思想を尊重すると同時に、法華経をベースとして懺悔の哲学を構築し、事と理の懺悔思想を打ち出した。摩訶止観で次のように述べている。

「普賢觀云。專誦大乘不レ入三昧。日夜六時懺六根罪。安樂行品云。於諸法無所行。亦不レ行不分別。二經本ト為相成スルト。豈可ニ執文ニ拒ミ競フ。蓋乃為縁前後互出。非ニ碩異一也。安樂行品ノ護持誦解說深心礼拝等。豈非レ事耶。觀經ニハ明ニ無相ノ懺悔。我心自空ヲ罪福ニ無レ主。慧日能ヲ清除。豈非レ事耶。」<sup>15</sup>

観經と法華経とは影略互顯の關係にあるから、両者、表現は異なつても、懺悔を指す点で同義である。

安樂行品にいう、法華経の護持、誦誦、解説等は、有相の事（行為）の懺悔であつて、この懺道によつて六根清浄を得るのである。

法師品、法師功德品等には、受持・誦・誦・解説・書写の五種修行の功德が説かれ、法師功德品では、六根清浄の果徳

が詳述されている。天台は、この五種修行を事の懺悔と読むのである。

天台は理（無相）の懺悔を説き、所依として観普賢經の、「我心自空。罪福無主。」をあげている。

懺悔は、自己及び自己の行為を一切否定するのであるから、造悪破戒以上のエネルギーを要するであろう。その大勇猛心を、事の懺悔においては誦誦等の修行の経力により得るのである。

理の懺悔においても、事の修行をたよりとし、一切存在が因縁仮和合の空（無）相であるという実相に体達し、懺悔するわけであるから、経力に拠ることに事・理懺共にかわりはない。

しかし、この罪福無主の思想は、法華経提婆達多品、龍女偈讚の、「深々達罪福相。遍照於十方。」と説くところにほかならない。

そこで天台は法華文句で、「今偈深達無罪無福。入一実相名爲深達也。十方即十法界。同以三実慧ヲ朗レ之。故言遍照也。」<sup>16</sup>と云っている。

理の懺悔思想もまた、法華経に深く根をおくものといわなければならぬ。

### 三 法華經と觀普賢經と金光明經

懺法に関する、觀普賢經と法華經との影略互顯の關係は、天台が指摘しているところであるが、最澄も法華秀句のなかで、「当三レ知。普賢經者。能結法華經也。」<sup>17</sup>といっている。

今日、觀普賢經の天台疏はみられない。しかし円珍は入唐中、天台疏を目撃したようで、智者釈、天台解として数々それを、円珍觀普賢經文句記に引用している。

文句記によれば、觀經の經体は、第五味法華の結經であるという。そして經宗は、六根懺悔の法によって、父母所生の肉身のまま清淨法身に成仏することであり、また、斷疑生信を經の力用とするが、一切懺悔によつて生身の普賢菩薩を感見すること、すなわち感応道交を得ることが最勝の功德であるといふ。<sup>18</sup>

法華、普賢勸発品では、受持誦誦等五種修行を、六根清淨の普賢行としているが、觀普賢經では、六根懺悔の法を普賢行としている。

昼三時、夜三時、十方の諸仏に対して五体投地の礼を行い、法華經の方便、法師、安樂行品等を誦し、諸法皆空の実相觀により六根懺悔を行えば、一刹那の即の瞬間に六根は清淨に帰する。

その効果は、好相を見る三昧の境地と陀羅尼とを得ること

によつて証される。好相とは、六牙の白象に乗つた三十二相瑞嚴の普賢菩薩が、同様の無数の菩薩と共に立ちあらわれることであり、これは夢中でもよい。夢は、心裡の眞実を見せるから。

好相についての説相も、陀羅尼の内容も、法華經と觀普賢經と全く異なるところはない。觀經は、法華經の懺悔思想が顯在化した懺悔經と見るべきであろう。

金光明經もまた、その正宗分は、寿量品、懺悔品等四品であり、懺悔品以下の三品においては、眼耳鼻等六根及び身口意三業についての一切懺悔 (*sarva desanani*)<sup>19</sup>により、六根清淨を期するのである。

天台は金光明經文句のなかで、懺悔の三種として、一に作法、二に取相、三に無生をあげている。<sup>20</sup>この区別は、懺悔の対象（処）及び方法によるものである。

作法とは受持、誦誦等の修行であり、取相とは好相を見ることをいい、無生とは空相を懺処とするものである。つまり理懺であつて、法華、龍女の偈の、「罪福（無主）相」を懺処とする。

法華經と金光明經と、その思想と表現とは数々一致する。金光明經は、法華經の懺悔思想を表出した派生經であらう。

（キーワード）戒、懺悔、六根清淨

（立正大学大学院終了：文博）